

# 木下川の子ども



1 9 5 7 年 度

~

2 0 0 2 年 度

5年

## ぼくの夢

一九五七（昭和32）年度

夢というものは、自分の思う通りには、い  
かない。何か、面白いものを見たいなあと思  
うと、こわいものが出て来る。こんどは、こ  
わいものを見ようとすると、おもしろいもの  
が出て来る。夢はほんとうに面白い。こんな  
ことは、うそだと思っただけでも、なんだかこ  
わくて目がさめる時がある。まだ暗かったの  
でもうひとねむりと思っただけで目をつぶると、こ  
んどはどろぼうが入って来て、ぼくをかつい  
で、グラランドの方に行く。グラランドにおかれ  
た、ぼくは「さむいなあ。」と思っただけで、目をさ  
ましたら、ふとんをけとばしていた。外を見  
たら明るかった。もうすぐに、おこされる時  
間だと思っただけで、ねたふりをしていて、おか  
あさんが、「もう、おきなさい。」と言ったが、  
ふとんの中で返事をしないでいると、二度目  
にふとんをまくられてしまった。ぼくはいや  
いやながらおきた。

## 家の金魚

一九五八（昭和33）年度

私の家の金魚は、私の家へ来てから、もう二年がたちます。みんなどれも勢いがいいのばかりです。

私の家のは、金魚ばかりではなく、池にいられています。その池は、二年前お父さんが作った池です。まわりの石は、お父さんが、ほうぼうから、買いあつめてきた、黒ぼくばかりです。もう石には、こけが生えています。

お父さんはいつも夕方になると、池に新しい水をいれます。金魚は、赤ばかりではありません。赤、黒、青、むらさき、白、だいだい色があります。金魚の種類は、ふつうの金魚、しぶ金、ひどい、でめ金、らんちゅう、あずまにしき、りゅう金、その中でも私の一番好きなのは、大きな、赤と白の色のまざった金魚で、おっぱが、十糶もあります。いつも、泳ぐ時は、おっぱを、ひらひらと動かして、まるで、金魚の中の、お姫様みたい

です、おっぽの所がひらひらと、ゆれるので、家のお母さんは、その金魚のことを、ドレスの金魚とよんでいます。この間、私が金魚をかぞえて見たら、五十ぴきもいました。ところが、この間の大水で、金魚が大分流されてしまいました。ドレスの金魚は、助かりました。いなくなったのは、三十五ひきです。私はドレスの金魚が助かったので、私は、ほっとしました。でも、また、ドレスの金魚が、あまりふとりすぎて、おなかのところが、ぷーとふくれてからだだが、さかさまになってしまいました。私は、てっきり、死んでしまったのかと、思ったら、まだ生きていました。今でも、ドレスの金魚は、さかさまになって、泳いでいます。ほんとうに、かわいいそんな金魚です。私はほんとうに、金魚のおいしやがあればいいなあーと思います。

一九五九（昭和34）年度

おてつだい

二十二日の日曜日のことでした。私はおかあさんに「おかあさん、てつだいをしてあげることから、こたつへはいっていいわ。」と、いったら、おかあさんは「そう。」と行ってこたつの方へ行きました。八時になって、おかあさんは工場の方へ行って仕事をしに行きました。私はおちやわんをあらって水がとつてもつめたのでこたつですこし本を読みました。そして、たら弟が「おねえちゃん、お金しらない」といったので、私は「おかあさんにきいて見たら」といった。弟は「おかあさんが、おねえちゃんにさいふをさがしてもらいなさい」といった。「と、いいました。私は「そう」といってお金をあげました。あたたかくなったので、こんどは、はたきと、ほうきをもつて、歌をうたっておそうじをはじめました。しばらくたつと家の中はたいへんきれいになりましたが、私はいくらきれいにしても、また弟や妹がち

らかすのかと、思うといやになりました。  
それから十一時ごろになっておかあさんの  
所へ行って私は「おかずはなにをするの。」と  
きくとお母さんは「そうね肉やさんに行って  
めんちと、ころっけをかってきてね」といい  
ました。私は、お兄さんにたのんで、肉屋へ  
いってもらいました。お兄さんがかえってき  
たときは、ごはんのしたくもみんなできてい  
つしよにごはんをたべました。

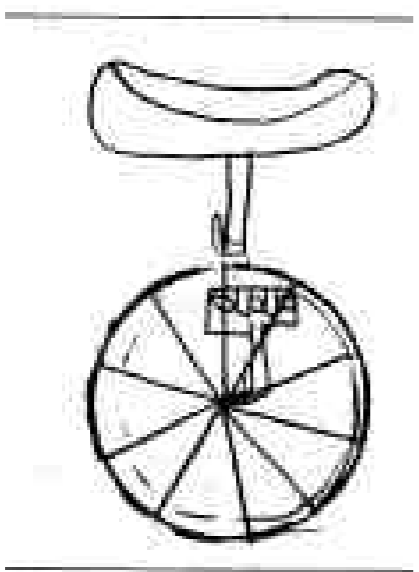
おとうさんが私のおてつだいをたいへんほ  
めてくれました。ごはんを食べた後みんなは  
テレビを見ました。テレビを見た後、お父さ  
んとおかあさんはまた仕事をしに行きました。  
私はおぜんをかたずけて、またおちやわんを  
あらい、おそうじをして 終わりました。

一九六〇（昭和35）年度

おとうさん

ある夜のことです。おとうさんがおばあさ

んの家に行ってお酒をうんと飲んで帰ってきた。よっぽらってなにもできません。お  
かあさんがでかけている時なので、わたしと  
妹でようふくをぬがしているとぶつぶつなに  
かくだらないことをいつています。ようふく  
をぬがせて、あんまりうるさいから、ねかし  
てしまいました。男の人ってお酒をのむと赤  
ちゃんになってしまう。よっぽらってしま  
と、わたしのゆうことをなんでも「はい、は  
い。」ということを書きます。よく朝おきてみ  
るとおとうさんはけろりっとしています。わ  
たしがきのうの夜のことを全部話してやりま  
した。おとうさんは「そうだったかなあ。」と、  
全々きのうのことをおぼえていません。忘れ  
てしまったのでしよう。わたしはそうしてし  
まうお酒がだいikiraiです。



一九六一（昭和36）年度

おばあさんへ

朝夕大へん涼しくなっていました。

おばあさん、おかわりございませんか。お

元気なすがたが見えるようです。

夏休みは、大そうお世話になりました。長

い間楽しく遊ばせていただきましてほんとう

にありがとうございます。

おかげさまで途中無事に、またあつい東京

へ帰ってまいりました。

十二時間汽車にゆられたら、秋田ののんび

りしたけしきが、アスファルトの道を車が急

がしく動くけしきにかわってしまいました。

でも私は黒ぐろとした体で九月をまっております

ますからどうぞごあんしんください。皆で、

テープレコーダーからながれるお声を聞いて、

なつかしいおばあさんや近所の皆さんのいろ

いろなことを話し合いお友達のお話もあきる

ことなくしばらく語りつづくことでしょう。

私は列車の人となつてからも、目に涙がい



っぱいになつて一言も話ができませんでした。  
お話をすれば涙がほほをつたつてこぼれる  
のをどうすることもできなくつて、長い旅を  
楽しませようとしてくれるお母さんたちをこ  
まらせました。

寝台車の旅、田舎の駅についた時十人乗り  
のバスで、みなさんがむかえにきてくれたこ  
と、先祖のお墓におまいりしたしたこと、お  
盆の日のこと、日本海に泳いだことなど、す  
いかやうりなど、台所にいっぱいつんであつ  
てたべきれなかつたことが思い出されます。  
その中で一番私の心に残っているのは船で八  
郎潟をまわつて干拓を見にいった時のこと  
です。

小高い丘からながめた広い広い湖の夕日に  
かがやくようすは何とも言い表すことのでき  
ない美しいけしきでした。

この八郎潟も近いしよろい広々とした平  
野にかわることでしよう。

八郎潟の姿は岸边に生れ故郷を訪ねる私ど

もになつかしさをおぼえさせ、また、いいし  
れぬ淋しさを感じさせられるとお母さんは語  
つてくれました。

自然のすがたをかえようとする人間の力の  
大きさにも感心しました。干拓の大事業が早  
く出来上る日を待つと同時に今まで私の心を  
なぐさめてくれた潟がなくなると思うと淋し  
くもあります。では、おばあさんのけんこう  
をおいのりいたしまして、ペンをおきます。

一九六二（昭和37）年度

読書感想文「坊ちゃん」

坊ちゃんは、親ゆずりのむてっぽうだった。  
それでときには、大変な失敗をしたこともあ  
る。あるとき友達にピカピカ光る西洋ナイフ  
を見せびらかしたら、友達は光っても切れる  
かどうかかわからないから「君の指を切ってご  
らん。」とじょうだんにいったら、坊ちゃんは  
指を、本気で切ってしまった。それは、あま  
りひどくなかったが、一生そのきずあとが残

ったそうだ、私はずいぶん思いきったことを  
やったなと思った。私にはそんなまねは、と  
うていできません。これは坊ちゃんの小学校  
時代のお話です。ほかにまたこんなこともあ  
りました。それは物理学校の卒業間近のこと  
です。校長先生によび出され、四国の中学校  
の先生になるように、進められて、きれいな  
数学の先生になった時の話です。四国の学校  
へ行き先生方にすぐ、あだなをつけた。校長  
先生には「たぬき」文学士の先生には「赤シ  
ヤツ」、英語の先生には「うらなり」、数学  
の主任の先生には「野だいこ」とつけた。  
私はこんなあだなをつけた坊ちゃんをいた  
ずらっ子のようになり、思いました。そしておか  
しくなっただけでわらってしまいました。これが校  
長、教頭の耳にはいったら、おこるだろうと  
思いました。坊ちゃんは、この中でいちばん  
いいと思ったのは、山あらしとうらなりであ  
ったようだ、赤シヤツは野だいこを子分のよ  
うに使って、坊ちゃんとはあまり気が合わな

かったようである、ある日、うらなり君は、  
学校をてんにんすることになった。坊ちゃん  
は、このうらには、なにかあると思った。や  
はりそのとうり、赤シャツと野だいこが、わ  
るだくみをしていたのであった。  
うらなり君は、おとなしくまじめだからい  
くきにはなっていた。坊ちゃんはそれがしよ  
うちできなかつた。  
うらなり君のそうべつ会の時は、赤シャツ  
はどんちゃんさわぎをした、でもうらなり君  
は、だまってすわっていた、ぼっちゃんはこ  
のうらなり君をきのどくだと思った。私の思  
うには、本人がさわいでいないのに、さわぐ  
と失礼だと思った。そのそうべつ会の帰りに、  
山あらしと二人で、赤シャツと野だいこを、  
ひどいめにあわせて、どろをはかせた、この  
時の坊ちゃんの気持ちは、はればれしていた  
と思います。

## 読書感想文

「ものをぬすむ親と子」を読んで  
これはイソップの話で、みじかいけれどた  
いへんためになると思いました。  
子どもがはじめてものをぬすんだとき、母  
親がほんとはおこるべきなのに、はんたいに  
ほめたので、わたしは母親の心がわからなく  
なってしまった。  
そのうち子どもがちよいちよいどろぼうをす  
るようになり、ついにつかまってしまうし  
た。  
むすこは役人に「母にないしよの話がある  
からよんでくれ。」と、たのみ、親に話すよう  
にみせかけ、耳たぶを思いつきりかみきりま  
した。親は「親不孝め」とおこりました。む  
すこは「かあさん、わたしはじめて物をぬ  
すんだとき、なぜおこってくれなかったの  
すか。そのおかげでいま死けいになるの  
す。」むすこはそうこたえました。このように

悪いことも大きくなるにつれて大きくなり、  
気がついたときには、どうしようも、なくな  
ってしまふのだと思いました。  
この話は「ものをぬすむ親と子」と書いて  
あるが物をぬすむのは子どもなのに、なぜだ  
ろうと思った。読んでいくうちに、子どもが  
ものをぬすむようになったのは母親がわるい  
のだから「ものをぬすむ親と子」と書かれて  
いるのだらうと思った。

一九六四（昭和39）年度

わたしたちのゆめ  
まず、はじめにぼくは、いい学校へ行って  
たくさん勉強します。  
おとなになつたら、もう外科の医者になる  
か、理工科にはいり研究しようかと思ってい  
ます。前には、天もん学者になりたいと思っ  
ていました。気がかわりました。その理由は、  
お金がもうからないし夜やるからです。いず  
れにせよ、みんなよりものすごく努力しなけ

ればなりません。その点は、がんばるつもりです。医者になったら、この町に、病院の分院をたてます。本院は、丸の内のちかくにたてます。そして、分院の方は、すこし安くします。安くするわけは、まずしい人がしんさつ料をはらえないとこまるからです。

本院の方はふつうのとおりです。それは、本院の町はまずしい人は、数えるほどしかないからです。また、よさんがあまったらこの町のためにきふします。こういうふうに、自分の病院を大きくして、それとおなじようにこの町も住みやすい町にしたいと思っています。

一九六五（昭和40）年度

わたしの家にくるしんせきの人は、バスにのって来ます。でも、おりるばしよはわかるのですが、おりるていりゆう所の名が、わからないのだそうです。でも家の近くになるとにおうからすぐにわかるのだといえます。わ

たしたちは、すみなれているせいかなそんな  
においはしないと思います。でも時どき、ぷ  
ーんと、なんともいえないにおいがする時も  
あります。でもしんせきの人が、くさいとい  
うのはうそではないことはたしかです。どう  
してかというのと、この町は、おもに皮の仕  
をしよく業にしている家が多いからです。わ  
たしの家の方では大きな皮工場があります。  
大きな工場は、あまりありませんが、小さい  
とっては、おかしいかもしれませんが、小  
さい工場はあんがい多いと思います。  
でも学校に通う時など、道のすみや道路の  
まん中に、皮のかすのようなものが、たまた  
まおちていることもあります。小さいのばか  
りではありません。時たま、大きな皮がおち  
ているときもあります。わたしは、きもちが  
わるいので、かけだしていきます。道のすみ  
におちていた方がいいと思います。  
なるべくくごみをすてないようにしていっ  
でもすみよいきれいな町にしたいと思いま



一九六六（昭和41）年度

「雪」

空から真白な花が、  
まいおりてきた。  
ヒヤッ。  
氷つくような冷たさ。  
しばらくみぬうちに、  
家の庭は花ざかり。  
葉のない花ざかり。  
でも太陽が高くのぼったら  
また自分の国へぎやくもどり。  
誰かさんがさけんだよ。  
「また遊びにきてねー。」  
雪はなごりおしそうに、  
あたたかい太陽に見送られて、  
寒いお国へ帰って行った。

ぼくの家の仕事

ぼくの家は印刷屋です。朝は九時ごろから夜はおそいで十二時ごろまでしています。おとうさんは、タイプライターをうったり、かつぱん印刷の字をくんだりします。おかあさんは、おとうさんのうったタイプの原紙をすります。ぼくが学校からかえってきた時は、仕事べやで、ガタンゴトンと機械の動く音がします。仕事をとりでかける時は、ぼくもいっしょにつれていってもらうのでいろいろのことがわかります。見ているととてもいそがしそうです。でもちよつとおもしろそうです。夜になってもごはんをいっしょにたべない時もあります。ごはんがすむと、すこしやすんでまたはじめます。十時ごろになると休けいしてお茶をのんでまたはじめます。おとなってたいへんだなと思います。ぼくもおとなになつたら印刷屋になりたいとおもう、そして今よりもっとりっぱにします。

一九六八（昭和43）年度

作文と詩

作文を書くのは大変だ。今、作文を書いて  
いるけれどなかなか題がきまらない。  
やっこのことできまっても、少ししか書け  
ない。ぼくは作文がきらいだ。頭をつかうし、  
字を書くのもやだし、「きねがわの子」に、  
のったりするからだ。  
だけど書かなければ、学校に残ってやらなけ  
ればならない。だからぼくは、早く帰りた  
いでやっている。  
でもあまり気がすすまない。それだし、た  
くさん書かないとだめだからです。みんなは  
どうか知らないが、ぼくは今ここに書いたと  
おりだ。ぼくは、時々こう思う。作文なんて  
作った人にお目にかかりたいと思う。それに  
作文がなければいいなと思う。  
世の中には、作文が好きな人もいるだろう  
と思うけれども、ぼくは、作文が、大の大的  
大きらいだ。

詩もきらいだ。だけど詩のほうがありました。詩は作文より短いし、書きやすい。それにうそのことを書いても平気だからです。作文は、うそのことをかけないのでむずかしいです。それに詩は何の題でもかけるけれど、作文はそうはいかない。だからぼくは作文のほうはそうはいかない。だからぼくは作文のほうはきらいで、詩のほうが好きです。

一九六九（昭和44）年度

かがみ

かがみはしようじきものだ。

こちらがおこれば、かがみもおこる

こちらがわらえば、かがみもわらう。

だけど一つうそがある。

右と左がはんたいだ。

大みそか

今日は大みそか、今年最後の日です。町の中がたくさんの人でにぎわいどこの家でも正月の準備で、あわただしくなりお店がとてもいそがしくなる日であります。私の家は酒屋さん。あいにく、今雨がふっています。お父さんはオートバイで配達ができません。だから、乗用車に荷物を積み康子おばちゃんに運転してもらい、お父さんが道を教えたり、荷物を運んだりしています。私とお母さんは、家で注文された品物をそろえたりしています。お店はともいそがしく、電話はリリーフンリフンとなって、私とおかあさんとはてんでこまいです。昼食する時間になっても食べるものがなかなか出来ません。午後二時ごろになってやっと食事をしました。私は午後から、お母さんにお酒をつつむのを教えてもらいやさしいのを手つだつてあげました。お母さんはとても喜んで、「助かる

わ。」と言っ  
てい  
まし  
た。そ  
れを  
聞い  
て私  
はと  
ても  
うれ  
しく  
なっ  
てに  
こに  
こし  
て手  
つだ  
って  
上げ  
まし  
た。お  
店の  
台の  
上は  
、お  
酒や  
、コー  
ラ、  
ジュ  
ース  
など  
がた  
くさ  
んな  
ら  
ん  
でし  
まっ  
て、  
なら  
べ  
る  
と  
こ  
ろ  
が  
あ  
り  
ま  
せ  
ん。  
配  
達  
す  
る  
人  
が  
帰  
っ  
て  
来  
る  
の  
が  
と  
て  
も  
お  
そ  
く  
感  
じ  
ら  
れ  
ま  
す。  
。

雨  
が  
や  
み  
ま  
し  
た。  
お  
父  
さ  
ん  
は  
、  
今  
度  
オ  
ー  
ト  
バイ  
で  
配  
達  
で  
す。  
私  
も  
お  
ぼ  
ち  
や  
ん  
と  
二  
人  
で  
自  
動  
車  
に  
乗  
っ  
て  
、  
手  
つ  
だ  
う  
こ  
と  
に  
し  
ま  
し  
た。  
ビ  
ー  
ル  
の  
一  
ダ  
ー  
ス  
を  
持  
っ  
て  
上  
が  
る  
時  
は  
重  
た  
く  
て  
手  
が  
い  
た  
く  
な  
り  
ま  
し  
た。  
あ  
せ  
も  
で  
ま  
し  
た。  
お  
父  
さ  
ん  
達  
は  
、  
毎  
日  
こ  
う  
い  
う  
こ  
と  
を  
し  
て  
い  
る  
の  
だ  
か  
ら  
本  
当  
に  
大  
変  
だ  
な  
あ  
と  
思  
い  
ま  
し  
た。  
夜  
に  
な  
っ  
て  
や  
っ  
と  
配  
達  
が  
お  
わ  
り  
ま  
し  
た。  
夜  
十  
時  
ご  
ろ  
夕  
食  
を  
食  
べ  
な  
が  
ら  
、  
テ  
レ  
ビ  
を  
見  
た  
り  
し  
て  
、  
今  
年  
こ  
そ  
は  
除  
夜  
の  
か  
ね  
を  
聞  
き  
た  
い  
と  
思  
い  
が  
ん  
ば  
っ  
て  
お  
き  
て  
い  
ま  
し  
た。  
。

初  
め  
て  
聞  
く  
か  
ね  
の  
音  
は  
、  
な  
ん  
と  
も  
言  
え  
な  
い  
よ  
い  
音  
に  
ひ  
び  
き  
ま  
す。  
一  
日  
の  
仕  
事  
の  
つ  
か  
れ  
も

なおるようなよい音でした。かねがなり終ると、私がまちにまっていたお正月、お正月なのです。

一九七一（昭和46）年度

変わっていきいなか

私は、一月十四日にいなかへ行きました。学校から帰って来て、すぐ着がえって行った。新らしくできあがった高速道路の新空港線を通って、成田まで行ってそれから茨城まで行きました。

いなかの家の近くに、大きな港が作られていて、家のそばに線路もできて、きてきをならして貨物列車が通っています。港の近くに石油コンビナートや合成ゴムなどの工場もできていて、えんとつから火が出ている所もあります。その火は、一年中出ていると、おかあさんがおしえてくれました。その工場は夜になると、黄色と赤の電気がついてとてもきれいです。工場のえんとつの中に、白いけむ

りが出ていたので、「あれ、工場のけむり。」とお母さんに聞いたなら、「おかあさんは、「あれは蒸気だよ。」とおしえてくれました。」工場には、たくさんの人が働らいているので、やがて市になるだろうと、この間電車で行った時、両国の駅まで乗って行ったタクシーの運転手さんが言いました。私はなんだかつまらないような気がしました。それは、いなかが東京みたいな都会になってしまったらいなかのような気がしなくなってしまうからです。いなかは、空気がすんでいて、じやりの道をげたで歩くとじやりじやり音のする、こういうのがいなかだとはつきり感じるようなところが私はいいのです。うちのいなかの家は、えんがわが表につき出ている、そして入るとすぐだだっぴろいへやがある。食事をする所が、たたみが半分、コンクリートの所が半分でそのほかのへやが四つある広い家です。屋根はわらぶき屋根です。やがてこの家も、港のためになくなって



しまうそうです。そうしたら、いなかの家も  
東京みたいな家になってしまおうでしょう。

一九七二（昭和47）年度

## 机

もうあれから六年にもなった。ずいぶんつ  
かったなあ、この机、買ったときはまだ学校  
にあがっていなかったが、何んだかとてもう  
れしかったのだけおぼえている。でも、今は  
まん中へんがゆがんでしまった。それは、机  
が古くなったし、ぼくたちがよくのっかって  
いたからだと思う。けんかしてはよく机をけ  
ったり上にのったりしたっけ。机のまん中に  
よく見るとセメダインのあとがある。これは  
使いっぱなしにしておいて知らないでのっ  
ふんづけちゃったんだっけ。セメダインのあ  
とだけでなく机の上はなにがなんだかわから  
ないくらい落書きがしてある。かいじゅうの  
絵、仮面ライダーあとはごちゃごちゃ。前  
の本だなは、本が今にも落ちそうにおいてあ

る。ちっともそうじしないから、ほこりだらけだ。本だなについているけいこうとうにも落書きのあとがある。仮面ライダーの絵、バカなんて書いてある。多分弟とけんかして頭に來て書いたのだろう。引き出しだって、シルがゴチャゴチャにはってある。パンダが三つそのほかいろんな動物、気にいったシルはここにはない。しまつてある。だから、考えなしにはったものだ。きずだつてついている、ところどころメツキもはげてきた。すみの黒いあと、これはこの間の書きぞめの時こぼれたやつだ。全体に古いからだろう。少しガタガタする。この机、ずいぶんそまつにしたな。でも今日だつて、きのうだつて、机のおせわになつてゐる。明日だつてそうだ。いつもいつもこの机におせわになつてゐる。ぼくは机に、「ここまでがんばつてありがとう。」といいたい。しかしよく持つたなあと思

おじいちゃん

おじいちゃんは、せいが高くて、顔は下口  
びるが出ていて、目はたれ目だ。一見、いか  
りや長介に似ている。ぼくと同じ、うさぎ年  
で、今年は七十二才になるが、とても七十二  
才には見えない。家に来るお客さんに、  
「治三郎さん、若いですねえ。」  
と言われると喜んでいゝ。おじいちゃんは、  
荒川からぼくの家まで、歩いてきているから  
たっしやで若いのかも知れない。でもこのご  
ろ神けいつうで毎日はいゝ。趣味は新聞を  
読むことと、旅行と庭いじりだ。新聞は自分  
の家でも、読んでくるが、家に来ても読んで  
いる。旅行に行くとき、ばからしいおもちゃば  
かり買って来るが、いつも忘れないでかなら  
ず、おみやげを買ってきてくれる。庭いじり  
も好きだが、庭によくきたないゴミをうめる  
のでおばあちゃんにおこられる。そういう時、  
「おれが、せっかくうめたのに。」

とおこる。おじいちゃんは、肥料にするつもりらしいが、ビニールのふくろやくさらさないものまでうめるので、おこられるのだ。お母さんが、ぼくのことをくどくどおこっている、おじいちゃんはお母さんにむかって、  
「おまえの小さい時は、どうだった？」  
と言う。そんなときお母さんは、つばを飛ばしながら、  
「子供の前でそんなこといわないでよ、昔と今とはちがうんだから。」と言って、お母さん  
とけんかになる。でも、ぼくたちにはやさしい。大きいおばあちゃんと、おじいちゃんはよく昔の話をしている。昔をおもいだしているのかもしれない。おじいちゃんの欠点は、  
「きちんと、ちゃんとやれ。」  
とよく言うことだが、おじいちゃんも、きちんとちゃんとやればいいと思う。たとえば畑を見に行っても、おじいちゃんの畑は、くさが、いっぱいいで、一番きたない。でも、このごろは神けいっつうで畑仕事もやれないので、

早くよくなつて畑のじまんや、ぼくや妹を成  
田山や浅草に連れていってくれるといいと思  
う。

一九七五（昭和50）年度

一月十四日（火）

母のいとこの、おねえさんのところに、故  
障したオモチヤを見てもらいに行った。  
そしたらとてもよろこんだ。さつそく見て  
もらった。そしたらなんともなかった。

ぼくは、おねえさんに、小さいころから、  
だいぶせわになっている。ぼくは、このおね  
えさんがいちばん好きです。だってこのおね  
えさんにオモチヤを買ってもらったりした。

帰りに千円くれた。

ぼくはこのお金でい  
ままでのおれいをし  
ようと思う。きつと  
よろこぶだろう。



一九七六（昭和51）年度

二月二十四日（木）

午後から、文花小学校へサッカーの試合に行った。向うの学校までの道のりは、そうとうあった。あまり歩いた事はないので足がいたくてしかたなかった。やっと着いた。回りはそんなにきたなくて、校舎はせまく、運動場は広く土はどろどろだった。男子はあみをはり、女子は練習した。文花のせいとは、やっと来た。体にゼッケンをつけていたので、私達もつけた。試合が始まった。女子が先で、相手は五年生の女子だと思っていたけれど、クラブの男子だった。みんなおもしろそう。人達ばかりだ。時間が終わってしまった。対○の引き分け、男子はなかなかはく力があり、みんなだろだらけでがんばっていた。男子もおわった。私は自分のことみたい。うれしかった。また、いつか、他の学校といっしょにサッカーの試合をやってみたい。でも、とてもつかれた。

一九七七（昭和52）年度

十月十日（月）曇り時々雨

親子ハイキングでくぬぎ山フィールドアスレチックへ行った。これはだいぶ前から楽しみにしていたものだ。それはアスレチックだ。けが楽しみだったのではなく、ぼくは鉄道がすきで前から一度、新京成に乗ってみたかった事もあったからだ。アスレチックでは木登り、橋わたりなど、ふだんできない事をたくさんやった。

帰りにちょうどよく記念切符を発売していた。おかあさんにたのんで買ってもらった。今日は一日中ついていた。

一九七八（昭和53）年度

二月十四日（水）

今日はバレンタインデーでした。私もチョコレートを買いました。一人に三百五十円一人に百円です。加藤先生には五十円

のチョコレートをあげました。今日から一ヶ月たつとホワイトデーです。三月十四日はどうなってるかな。

一九七九（昭和54）年度

二月十五日

うちに帰ってきたら、おき手紙がおいてあった。見たら、「ふんとりこんどいて・・・母より」と書いてあった。おねえちゃんあてだけど、当分、帰ってきそうもなく、わたしは、急いでとりこんだ。だけど、ふとんは、とても重く、運ぶてまがかかった。それでよろめいたり、落としそうにもなった。ついでに、洗たく物もとりこんでたたんだ。こんなに重いのお母さんはよく運べるなあと思って感謝した。



一九八〇（昭和五五）年度

二月十九日

歯医者さんへ行った。何をやるのかとどきどきしているのと、銀をつめることになってい  
るそうだった。「はいかんでー」「はいあい  
てー」のくりかえしだった。何か白い物をぬ  
って銀をつめた。そしたらすっぱいかんじだ  
った。そうしたらとなりの席に4才から5才  
ぐらいの男の子が来た。初め「やだやだ」と  
言って鳴きだした。私が見ていると「ほーら  
お姉さんも見てるよ、わらわれるよ。」といっ  
ていた。そして受付にでてその男の子に「お  
ねえさんいたくなかったよ。」と行ってあげた  
ら「ぼくもいたくなかったよ。」といった。

一九八一（昭和五六）年度

### 未来の学校

未来の木下川は、朝、学校へ行く時ワイプ  
で行けて階段は、エスカレーターで、戸が自

動ドアで、寒くなったら、一人でに暖房が  
きいて、暑くなったら、すぐに冷房がきくよ  
うになっていて。先生はロボットで机はテレ  
ビになっている。ろうかは、一人でに動く。  
学校は、建て直して百階建て。一人に一つづ  
つ教室がある。毎日、いろいろな国へ給食を食  
べに行ける。それから、遊びは、背中に羽を  
付けて、いろんな所を飛びまわれる。自動車  
は、磁石の力で浮いて走る。遠足は北から南、  
どこへでもたったの十分で行ける。もしこれ  
が本当になかったらいいな。ワイプもできて、  
階段もエスカレーターで、戸が自動で、暖房  
が一人でに。先生はロボット。いろいろな国へ  
給食を食べに行ける。机はテレビ。学校は、  
百階建て。教室は、一人に一つづつ。あああ、  
これが全部かなったら文句なしなんだけどな  
あ。

一九八二（昭和57）年度

一月十八日（火）晴れ

今日は、新しい理科の先生が来ました。名前は、山下智子先生です。

五つ子ちゃんと同じ名前です。

今日の、理科の勉強は、十分しかしませんでした。あとの時間は、自己紹介などをしてしました。

私から、見た、山下智子先生は、なんとなく、きびしそうで、よく、遊んでくれそうなのに見えました。

そんな、すてきな女の先生で、良かったと思っ  
ています。

もうすこしで、山下智子先生も、私たちの、名前を覚えてくれると思います。

これから、先生と、みんなで、よく、理科の勉強を、学ぼうと思います。

でも、本当に、理科の勉強が、よく、できるかどうかは、わかりません。

一九八三（昭和五八）年度

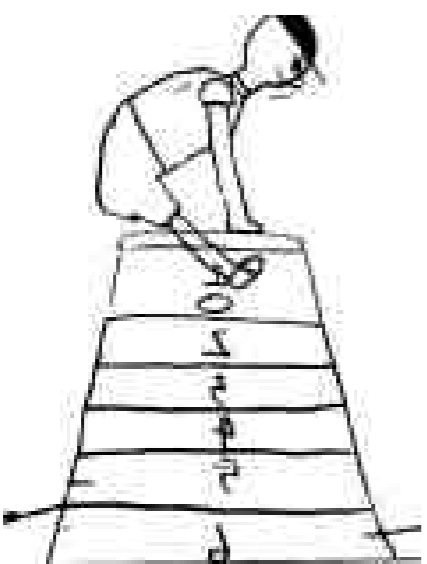
今日五時ごろ、Kちゃんにおさいふを買いに行くのにつきあってもらってからそろばんに行った。ここまでは元気だったのに：：。それからテストを返してもらったら、Kちゃんは合格じゃなくて、私が合格しちゃったので、Kちゃんはなんかさみしそうだった。そして、とうとう帰りまで話さなかった。私が「いっしょに帰ろう。」といったら、さみしそうな声で、「う・ん。」ていていた。

四級と三級は時間は同じだけど、やっぱり教科書と暗算の本がちがうからいやなんだなあ。

こういうときはどうしたらいいんだろう。

一月十日（火）

Kちゃん元気だったあ。よかったあ。



一九八四（昭和59）年度

二月一六日（土）

今日は、お姉ちゃんの誕生日です。私の誕生日は、三月一九日。誕生日は、プレゼントはたくさんもらえるし、ケーキも食べられるので、私は誕生日が好きです。でも、今日のお姉ちゃんのお誕生日では、ケーキはないので、残念です。そして、私とお母さんと新太と十二歳になるお姉ちゃんとの誕生日をやりました。歌を歌ったりゲームをしたり、とってもにぎやかにできたので、良かったと思います。その中でも一番はりきっていたのは、新太です。私が歌を歌うと、新太はそれに合わせて踊るので、とってもおもしろいです。そして、最後に私が、お姉ちゃんにプレゼントをあげました。お姉ちゃんは、喜んで、「ありがとう。」  
と言いました。私があげたプレゼントは、ミッキーマウスの小物入れです。お姉ちゃんも、私があげた、プレゼントを、気に入ってくれ

たので良かったと思います。

一九八五（昭和60）年度

二月二十六日（水）

今日の夜に、ぼくの誕生会を、やりました。その誕生日会のまえに妹とぼくは、けんかをしてしまいました。ぼくは妹のことをけつとぼし、妹はぼくにものをなげました。そして、へんな気分で、誕生会をやりました。ぼくは、母に、プレゼントがわりに二千円もらいました。ぼくはてつきり妹の誕生日にプレゼントをあげていないからプレゼントはくれないと思っていました。ところが、千円もかけて文房具を妹がぼくにかつてくれたのです。その時「さつきけつとばさなければよかったな。」と思いました。そして、あとで母にそのことをいってみるとなんと妹は、母がようじがあつていけないのに、むりやりたのんで文房具やに、いってもらったそうです。ぼくは、その話を聞いて、ほんとうにうれし

かったです。

一九八六（昭和61）年度

十一月八日（土）

今日は、大林さんと私で遊びました。なに  
したかというところ、編みものをして、遊びまし  
た。編みながら、荒川に、行きました。かわ  
らの方へ行ったら、アクエリアスのびんの中  
に手紙が入っていました。読んでみたら、  
「お手紙ください。」と、書いてあり、住所と、  
名前も書いてありました。名は、吉田大起と、  
友香で江東区に住んでいるようです。さっそ  
く手紙をうまく書きました。きれいに書いた  
のでとても手がいたくなってしまうました。  
そしてふうとうを買ってきて、切手をはりポ  
ストへ入れました。手紙の中には、「私の近  
くに荒川という川があります。そこでみつけ  
ました。あと、Aさんもまえ見つけたという  
はなしをききました。写真送ってください。  
あと、友達になろう」と、書きました。返事

が楽しみ、そのことあした、先生や、みんなにじまんしようかなーと思いながら夜、出してきました。

一九八七（昭和62）年度

一月二十七日（日）

今日、弟と二人で新幹線に乗っていなかへ行きました。上野の駅までお父さんとお母さんと妹に送ってもらいました。ホームにつく間に弟は、別れるのがつらいせいか泣き出してしまいました。けれど弟は、「かってになみだがでてきたんだよ。」といいました。新幹線に乗ってホームを出るとき、私もなんとなくなみだが出てきました。ホームを出てから、お弁当を食べたり本を読んだりしました。今年は、子どもだけでいなかへ行く人多かったです。乗ってる途中しゃしようにさんや車内販売のお姉さんなどが通りました。福島の駅へ着いたら、おばあちゃんとおじいちゃん



んがむかえにきていました。福島駅のホームには、むかえにくる人が多くいました。おじいちゃんの手でおばあちゃんの家まで行く途中に、イトーヨーカドーへ行って、夕食の用意を買っていきました。着いたらすぐに、東京の家へ「今着いたよ。」と電話をしました。

一九八八（昭和63）年度

七月二一日（木）

今日はひまでひまでしようがないのでへやをそうじしたり、おさらをあらったりしていました。一人だったので育見ちゃんとカルピスでもゆっくりのもう！と思って、育見ちゃんをよびました。とっても話をしたので口をとじるひまもないようでした。そして、その夜は弟のまことの通っている保育園のうりよう会があるので、ゆかたをきて、行こうよとさそってみました。家でゆかたに着がえたり、いそがしいときです。お母

さんと弟は、さきに行ってしまったうし、雨はふるは、ゆかたはぬれるはと大きわぎ。やっと着いたと思うと三十分くらいたったら帰りました。ヤマザキでパンをかって、福祉会館で食べました。家に着くともう、外は雨でぐちやぐちや、七時三十分、まっ暗でゆうかいされそうなかんじ。だから、いくみちゃんの家  
に電話して、私の家でとまることになりました。夜中まで音楽をきいたり、おしゃべりをしたり、テレビを見たり。「記念に写真を取ろう。」とお母さんが言うので写真を取りました。夜中の十二時すぎまでペラペラで、朝、七時に起きてあんまりねてないので、次の日はイライラしてケンカぎみでした。

一九八九（平成1）年度

二月六日（土）

私はピアノを習っていて、毎週火曜日になるとレッスンを受けに行っています。時間は

5時半です。

今日私がレッスンをしている部屋に行くと、小さな女の子がピアノのレッスンをしています。私はその女の子を見たことがないので、新しく入った子だと気づきました。私は5才ぐらいだと思いましたが、先生に聞いたら3才だと教えてくれました。その女の子には弟がいて、その弟がお姉ちゃんの名前をしていますが、その女の子がいつしようけんめいやっているのを見ると、私が入ったころのことを思い出しました。私が入ったときの先生は、今年の3月にけっこんをするのでやめてしまったが、私が練習をしてこなくて先生から「やる気がないのならやめなさい」と、言われたことがあります。私はピアノを好きで習っているのです、しっかり練習しようと思いましたが、だっってここでやめたらピアノをやっている意味がないと思っただから、今までやってこれたと私は思いました。

一九九〇（平成２）年度

一月十六日（水）

チビが今日、死んでしまいました。内臓の病気で：。チビは朝、チビの家の前でたおれていました。でもまだその時はまだ息をかすかにしていました。私は朝ずっと泣いていました。お父さんは「医者に行くけどきつとだめだと思うんだ。」と言ったからすごく悲しかった。学校に行く前もずっと泣いていました。でも「元気出して！」とお母さんに言われ学校に行きました。学校でもチビのことばかり気になってました。「あーもう医者に行ったかな。」とか思っていました。でも途中から「チビはきつと助かる！」と思いこみました。家に帰ってチビの家の中をドキドキしながら見たら、いなかっただから「助かったんだ！きつと入院しているんだ！」と思いました。すぐにお母さんのいる会社へ電話をしたら「だめだったの：。げん関の前にいるからおまいりすれば？」と言われた時、私は声も出なな

った。その後私はいつぱい泣きました。私がチビのおまいりをする時、チビの死んだ顔をずっと見ていられませんでした。

一九九一（平成3）年度

### 日生ききじょうの感想

今日は、日生ききじょうに行きました。

わたしは、行く前日に用意をしておきました。おべんとうは、お母さんが5時におきて作ってくれました。水とうも、あったかいお茶を入れてくれました。

わたしは朝7時30分ぐらいにおきて、いそいで用意して、ごはんを食べて、8時3分か8時にはもううちを出ました。とうこうはんの集まる所に行ったら、もうひとみちゃんが来ていました。「じゃあ、行こう」とひとみちゃんが言ったので、わたしも「うん、行こう」と言いました。なおちゃんの家の前についたときは、もう10分ぐらいだったので「早く行かなくちゃ」となおちゃんが言いま

した。わたしも「うん、早く行こう」と言っ  
て、走って行きました。学校についたらほと  
んどの人が来ていたので、「もうみんな来て  
るんだね」と言ったら、なおちゃんも「ほん  
とだね」と言いました。8時20分になって、  
みんなが集合して、校長先生にあいさつした  
あと出かけました。電車に乗って東ぎんぎで  
おりました。

日生げき場について、ブザーがなったあと、  
げきが始まりました。一番最初にユートピア  
学園についたときは、うしろにいすがあって、  
うしろ向きに立っている人がいたので（何をや  
っているのかな？）と思ってじっと見ていたら、  
その3人の人は先生でした。少したったら生  
徒が出てきて「空想をしたり、ゆめを持った  
りしてはいけないのです」と言ったとき、わ  
たしは（どうしていけないのかな？）と思い  
ました。セールスマンが「エルコスロボット  
は、洗たくからゴミすて、教育もこのロボッ  
ト1台で、何でもできてしまいます」と言う

と、校長先生が「買いましたよ」と言って：  
：次の日、エルコスロボットがユートピア学  
園にとどいてから、そうじと洗たくはもちろ  
んやって、それにみんなの笑顔をとりもどす  
ために、いろいろな洋服を着せて、おどった  
り歌ったりして楽しませて、それにゆめを持  
たせて、わたしは（エルコスがこの学園に來  
てよかったな）と思いました。最後に消えて  
しまったとき（みんなはとてもさみしかった  
んだらうな）と思いました。ダニエラさんた  
ちもいい人になってよかった。

一九九二（平成4）年度

町のうつりかわり

今、木下川のぼくたちの町は道がせまいの  
で広くする工事をしているのを何回も見ます。  
家を取りこわして新しくしたりして道を広く  
しています。ぼくが一年生のころ、通学路に  
大きい木があったのに道を広くするので木を  
切ってしまった。その大きい木の下には

家があったけどなくなってしまった。家も少なくなってきたようです。家をみんなとりこわして大きいビルみたいなものになってなおしています。

皮工場も駐車場になったりで、どんどんぼくたちの町の皮工場などがとりこわされてしまっています。道を広くするためには大きい皮工場が小さい皮工場になってしまったところもあります。皮工場も少なくなってしまったようです。

あまり皮工場をこわすと皮のくつやバックやランドセルが使えなくなるんじゃないかなと思いました。町はどんどんかわってきたなと思いました。





一九九三（平成5）年度

やさしい人

朝、学校へ来て、体育倉庫のカギを持って、体育倉庫に行く途中に、五匹くらいのカラスがいて、カラスが体に油をかぶった様に光っていきもち悪かったです。ぼくはその時誰か来てほしいと思いました。その時まこちゃんが出来て、「まこちゃん。」「なあーにー。」「カラスがいるからついて来てー。」「いいよー。」と言ってくれました。そして体育倉庫にまた向かいました。そしたらカラスたちが待っているように、みんなでピョンピョンはねていました。そして歩いてどんどんカラスへ近づいていくと、カラスが少しずつにげて行きました。そして体育倉庫においつめたら飛んでにげていきました。「ありがとう。」と言った。「いいよ。」と言いました。それからぼくはカラスをこわがらなくなりました。木下川小には、こんなやさしい人がいます。楽しい木下川小学校です。人は必ずやさしい

心を持っていきます。だから、木下川小の人はみんなやさしいと思います。ぼくも人の気持ちを考えて木下川小学校を差別のない学校にしていきたいと思いました。

一九九四（平成6）年度

## 家族

私の家族は、お父さん、お母さん、姉二人の五人家族です。

今年の春休み、私の家の裏が火事になりました。「火事だっ。」とお父さんが言った時は、本当にびっくりしました。たしかに、まどの光が明るくなったり、暗くなったりして、変だとは思っていましたが、それが本当に火事だったので。ちょうど、まり子おばちゃんがいて、急いで電話をしてくれました。お父さんは、工場へ行って火が移らないように水をまいていました。わたしたちは、とりあえず、まり子おばちゃんの家へ行っていました。消防車などが来たので、まどから

見ていました。わたしたちは、裏の工場へ向  
かって「ばかやろうーっ。」と言っていました。  
なみだがぼろぼろ出てきました。

お父さんは、心臓が悪くて、入院したこと  
があります。だから、工場に火が移るかもし  
れないと思って、心臓がドキドキして救急車  
で運ばれて行きました。お母さんが出かけて  
いたから、私の家の裏が火事だと知ったら、  
どんなにあわてるだろうと思いました。私は、  
火が消えますようにとか、お父さんが前より  
体が悪くならないようにと思いました。

私の家は、皮を染める小さな工場なので、  
火が移ったら大変でした。移ってでもいたら、  
大火事になってるだろうと思いました。でも、  
けむりがよけていったのでよかったです。  
火が消えたので部屋に入ったら、すっごく  
いやなおいがしました。雨戸がしまらなく  
なっていて、ガラスが割れていました。黒い  
燃えかすが、たくさん入っていました。お母  
さんが帰って来たので、全員で家の中のそう

じをしまいました。火が消えてよかったけど、すぐこわかったです。

しばらくして、お父さんが退院して来たので、やっとほっとしました。それと、だれもけがをしなくてよかったです。

一九九五（平成7）年度

自分を見つめて  
ぼくは、5年のクラスの友達に、良い点、悪い点を書いてもらいました。

長所では、男子の意見「サッカーなどでよく遊んでくれる。いっぱい意見を言う。人がこまったら、助けてくれる。いつもじゅぎょう中にケシゴムをかしてくれる。」

女子の意見「スポーツがうまい。笑わせてくれる。仲間はずれをしない。」

短所では男子の意見「ちよっとおこりっぽい。すぐぶっ。」

女子は「すぐおこり、じまんする。音楽の時間、話しかける。」とありました。

あとで自分で考えてみると、自分では、短所は、「人をバカにしたりする、わがまま。」と思う。

ぼくは、五年の一学期はすごく悪さをしていたと思います。

でも今は、けっこう人にやさしくなりました。

ぼくは、今までいやなことをいっぱいしていたのに、みんなは、やさしいと思いました。

ぼくは、人がちよつと失敗したら、すぐもんくを言います。

たとえば、「なにやってんだよう。」とか言いました。そういうことを言つて、人の心をキズつけてしまいました。そういうことをしてきて先生に「友達の気持ちに、気づけ。」といわれたからなおったんだと思います。友達の気持ちもそれでわかった。

友達をいじめてきたのにみんなぼくにやさしくしてくれただと思いました。

## 夢

一九九六（平成8）年度

私の夢は、デザイナーになることです。それで、子どもを産んで、子どものようなふくをデザインしてあげたいです。子どもものふくばかりではなく、ほかのようふくもいっぱいデザインをして、私がデザインしたふくがデパートや、店におかれることが、夢です。いっぱいのお店におかれてほしいです。それで、すごい、すごい、といわれたいです。

いろいろなようふくのデザインをしたいと思います。水着から動物のようふくとか、人間のようふく、いろいろデザインしたいです。

一九九七（平成9）年度

『にじをつかむ男』を見に行った

一月七日（水）

今日、朝、おばあちゃんに、9時半にうち

来てねと言われました。ぼくは、にじをつかむ男という映画はどういうストーリーで、どういう映画かなあと思いましたが、ぼくは、早めに行くために9時20分アパートを出ました。それで、ちよう特急で行きました。それで、おばあちゃんの家に着きました。おばあちゃんは、したくをして、出発はふくしのとなりの公園の所のバスで待ちました。そして、乗って、百円をはらって入りました。そして、おばあちゃんに「どこで止まるの。」と聞いたら、「雷門。」といたので、15分くらいたって、そこに着きました。それで、雷門の商店がいを通って行きました。やっと見つけました。さっそく入って、ホールに入ったら、やっていきました。ぼくは、(マンガの映画もいいけど、こういう日本映画もいいなあ)と思いました。これは見に来てよかったと思いました。オ리콘ざという映画館がつぶれちゃって、(本名)西田敏行が映画の旅をしている中で、

りようと会って・・・というストーリーでした。  
映画館を出て、おばあちゃんも  
「あー、おもしろかった。たまにはこういう  
ところで見ても、おもしろいわね。」と言って  
いました。ぼくと同じこと思っているんだな  
あと思いました。ぼくは、本当に映画館に来  
たのは久しぶりで、前に行ったのは『野口  
英世』の映画だったから、すごい前だったで  
す。

それで、そのほかに行ってみようかという  
ことで、昼ごはんを食べる場所をさがしたけ  
ど、いいところがありません。これもだめ、  
これもだめと言ってるうちにつかれたので、  
ちよつとした店で、チョコレートパフェを食  
べました。このチョコレートパフェも食べた  
のが久しぶりで、もう何年も食べていません  
でした。ぼくは、おいしいと思った。こんな  
生クリームをケーキにつけないで食べていい  
のかと思いいながらもがつがつ食べました。お  
金をはらって八広に帰りました。それで、お



ばあちゃんに行かれて、久しぶりのものがい  
っぱいだなと思いました。

一九九八（平成10）年度  
十二月三十一日（木）

今日は、朝の八時ごろにおきて、九時ごろ  
銚子に向けて出発しました。

私は、前の家が千葉に近かったので、何回  
か行った事があったのであまりワクワクはし  
なかつたけど、銚子には、海があるのでうれ  
しかったです。

みんなで、海を見てから水族館に行つて、  
イルカのしよや、アザラシを見ました。顔  
がとっても楽しかったです。そして、てんぼ  
う台の所で写真をとったりして、ソフトクリ  
ームを食べたりしました。

私は何回か行っていた銚子はよく知ってい  
ました。

そして、水族館の屋上から海を見たら「は

あっ。」と思いましたが。

それはどうしてかと言うと、その水族館は、海にかこまれていて海がすごく丸く見え  
ました。

私は、（地球って本当に丸いんだなあ）と  
思いました。

ちがう県の海も見たいなあと思いました。

一九九九（平成11）年度

今、この町に残っている自然

今、この地球から自然がどんどん減って  
います。この町は皮工場が盛んです。そのため、  
水の汚れやにおいなどが出てしまいます。今  
は昔より公害が減ったからいいけれど、それ  
でもやっぱり自然は減っています。  
その日、普通通り、三時頃に帰りました。  
ぼくは「久しぶりに中川に行こう。」と思って  
友達をさそってみました。そうしたら、弟の

暁や牧野君たちが「いいよ、行こう、行こう。」とかなり乗り気だったので、さっそくあみを準備して出発しました。中川には自転車で四分くらいです。入口にはさくがあつて自転車で入れないので、そこに止めました。中川についてからまず、虫取りをしました。みんな見つけるのがうまくて、「やったあ。」とか、「また見つけたよ。」とか言つて、次々につかまえていきました。でも、だんだんと疲れてきて、ちよつと休みました。その時に川を見たら、銀色に光る物が動きました。何だろうと思つて一気に、バサツと網ですくつてみました。ちよつとドキドキしながら網の中を見ました。見てぼくはびっくりしました。その中には今、絶滅しかけているメダカが入つていました。ぼくは、「やったあ。」と思つて、「みんなに、川の中にメダカがいるよ。」と言いました。そうしたら、「えーっ、うそ。本当に。」と言つて、坂から下りてきました。そしてみんなでつかまえ始めました。最初は

簡単に取れたけど、すばしっこくて、五匹しか取れませんでした。そのうちに壁に追い込んでいったら、一匹また一匹と取れました。ぼくは、「そろそろ帰るころかな。」と思って時計を見たら四時半でした。「みんな、そろそろ帰らない。」と言った時、暁が、「せっかくつかまえたのにもったいないから家で飼おうよ。」と言いました。でも、ぼくはメダカがバケツから飛び出しているのを見て、出たそうにしているなと思いました。それで、つかまえたメダカは逃がしてあげました。この町の自然も、なくなりかけています。そんな町の中で強く生き続けているメダカにぼくは感動しました。二十一世紀はぼくたちが大人になる時代です。将来、ぼくはこの地球のなくなりつつある自然を増やしていききたいと思います。

お母さんから聞いたこと

ちよつと前、お母さんに聞いた話だけど、ぼくが四年生ぐらいのとき、お母さんが東京けんこうランドというところに行きました。ぼくが、るす番していました。はじめは、お母さんは、ゆっくり楽しんでいたそうだけど、八時ぐらいに、二階のろうかみtainところを歩いていたら、よつぱらった人にぶつかつたのでお母さんが

「ごめんなさい。」

と言ったら、その人は、お母さんに「なんだ、おまえ、中国人か？ 韓国人か？ 早く自分の国に帰れ！」

と言って、お母さんの顔をおもいきりなぐつたので、近くにいたけんこうランドの人がいそいでとめたそうです。お母さんは、はな血を出していたかったそうです。

その話を聞いて、とっても頭にきました。いくら、よつぱらいでも、ぶつかつただけ

で、わる口をいったり、なぐったりして、あやまっっているのに、そんなことをするなんて、ゆるせないと思った。

「韓国に帰れ！」

と言われても、帰れない人もいるのに、（ななんてことを言うんだ！）と思いました。でも、じっさいには、ぼくがそこにいても、何もできなにかもしれないと思いました。かなしくて、泣きそうになりました。

でも、お母さんは、そんなことをされても、めげないから、すごいと思った。

それで、土曜日に、そのことを学校で話しました。

それで、すずき先生が、朝鮮学校の林先生という人の話をしてくれました。

その次の日に、教会に行つて、勉強をしていたら、聖書に「自分をはくがいするもののために、いのれ。」と書いてありました。先生に聞いたら、

「自分をいじめたり、いやなことをする人た

ちをゆるせるように、いのる。」という意味で  
した。  
でも、ぼくには、そんなことすぐにはでき  
ないと思いました。ぼくは、  
（自分たちが韓国人でも、べつにいいじやな  
いか。）  
と思いました。

二〇〇一（平成13）年度

### 組体操のタワーの練習の事

六月一日

「いてえっ。」ただひろ君が、ぼくの背中  
あばら骨に乗った。ぼくの体にズキンと痛み  
が走った。だけどぼくはがまんしてこらえた。  
ぼくの上に乗っているただひろ君の足が、ぼ  
くの背中でズルツと動いた。だからぼくは、  
（だいたいようぶかな）と思った。でも急に重  
くなったから、ぼくは、（一番上にみなこち

やんが乗った」とすぐわかりました。かりべ先生や鈴木先生は、タラタラしている人を見ると、「しっかりしろ！」とどなります。ぼくたち四、五年は、六年とやる時は上です。ぼくも上に乗っているけど、肩を組んでバランスをとるのがむずかしいです。一歩まちがえると全体がゆれて、くずれてしまいます。あとぼくは、背中を丸めないことをうまくやりたいです。全体をかんぺきにできるようにがんばりたいです。

タワーで一番こわいのは、一番上の人だと思います。だから、ぼくは一番上の人がかわがらないように、ちゃんとしたいです。とつぜん力がふわあつとぬけないように、ビシツとやりたいです。

二〇〇二（平成14）年度

栗野自然学園へ行ったこと

一日目、楽しみにしていた栗野に出発です。



電車の中で、はいくを作ったり麦畑をながめたり、しおりちゃんとおしゃべりしたりしました。新栃木駅についたら空気がおいしかったです。バスに乗ってバスレクをしました。ずっとビンゴなどをやって楽しかったです。ずっとバスに乗っていたら山の岩の上にサルが一匹きだけいました。野生でした。野生のサルは、初めて見ました。それを見たのは、私と先生だけでした。学園について荷物をおいて学園を出しました。マスづかみがとても楽しみでした。山の中をずっと歩いていたら、やっと思川について水をさわったら、とても冷たくて気持ちよかったです。マスは思ったよりぬるぬるしていてつかみにくかったです。やっと一ぴきつかめました。マスを、塩焼きにして食べてとてもおいしかったです。学園に帰って夕食を食べてからみんなでキャンプファイヤーをやりました。ダンスをおどったり歌を歌ったりしました。花火をやってとてもきれいでした。その前におふろに入ってすごく広

くて気持ちよかったです。足をバタバタさせたり泳いだりして遊んで楽しかったです。ねるときにふとんのカバーをかぶせるのが難しかったです。ねなくて私が「しおりちゃん、ぜんぜんねむれないね。」と言ったらしおりちゃんが「うん。ねむれないね。」と言ってずっとおしゃべりをしていたら、ねむくなってきてねました、明日が楽しみだと思いました。

二日目は朝起きたとき、いきなり大きな音で音楽がなったのですごくびっくりしました。朝食を食べてハイキングの準備をして外にでました。牧場について横根山に行きました。歩いていたらだんだんつかれてきました。少し歩いて「つつじが原」でやすんだらまた歩いてやっと「象の鼻」につきました。すごくいい景色でした。「象の鼻」の一番上から見た景色は、木がたくさんあって気持ちよかったです。景色を見ながら栗野の調理士さんたちが作ってくれたお弁当を食べました。学園

についてからちかくのおみやげ屋さんにおみやげを買いに行きました。私は栗のクッキーとらっきょうを買いました。そして学園で竹細工をやりました。はしをけずるのがむずかしかったです。できあがったときは、少し変かな？と思いました。百物語をしてからきもだめしをやって、少しドキドキしてこわかったです。学園の中の三階で一番おくの部屋で名前を書いてくるのをやりました。行ってみると、あんまりこわくありませんでした。ねるときに、先生としおりちゃんのでトランプをやりました、少したってねむくなるまで遊んでいました。

三日目、朝は二日目の音楽よりうるさくない音楽が聞こえました。少したってしおりちゃん起きました。荷物をリュックにつめて朝食を食べました。一時間くらいたってそば打ちをやりました。ねるのは少しむずかしかったけどほうちようで切るところを校長先生とかに「切るのうまいねー」と言われました。

直裕君はこねるのがうまかったです。そばが  
ゆであがってみんなでたべたらすごーくおい  
しかったです。三日間楽しいことがたくさん  
ありました。今でもときどき栗野のことを思  
い出すことがあります。こわい話もあったけ  
ど、またいきたいなあと思います。

